

# 気のいい火山弾

宮沢賢治

青空文庫



ある死火山のすそ野のかしわの木のかげに、「ベゴ」というあだ名の大きな黒い石が、永いことじいつと座<sup>すわ</sup>っていました。

「ベゴ」と云<sup>い</sup>う名は、その辺の草の中にあちこち散らばった、稜<sup>かど</sup>のあるあまり大きくない黒い石どもが、つけたのでした。ほかに、立派な、本とうの名前もあったのでしたが、「ベゴ」石もそれを知りませんでした。

ベゴ石は、稜がなくて、丁度卵の両はじを、少しひらたくのばしたような形でした。そして、ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いてありました。非常に、たちがよくて、一ぺんも怒<sup>おこ</sup>ったことがないのでした。

それですから、深い霧<sup>きり</sup>がこめて、空も山も向うの野原もなんにも見えず退くつな日は、稜のある石どもは、みんな、ベゴ石をからかって遊びました。

「ベゴさん。今日<sup>こんち</sup>は。おなかの痛いのは、なおったかい。」

「ありがとう。僕<sup>ぼく</sup>は、おなかが痛くなかったよ。」とベゴ石は、霧の中でしずかに云いました。

「アアハハハ。アアハハハハハ。」稜のある石は、みんな一度に笑いました。

「ベゴさん。こんちは。ゆうべは、ふくろうがお前さんに、とうがらしを持って来てやったかい。」

「いいや。ふくろうは、昨夜<sup>ゆうべ</sup>、こつちへ来なかつたようだよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」稜のある石は、もう大笑いです。

「ベゴさん。今日は。昨日<sup>きのう</sup>の夕方、霧の中で、野馬がお前さんに小便をかけたろう。気の毒だったね。」

「ありがとう。おかげで、そんな目には、あわなかつたよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」みんな大笑いです。

「ベゴさん。今日は。今度新しい法律が出てね、まるいものや、まるいようなものは、みんな卵のように、パチンと割ってしまうそうだよ。お前さんも早く逃げたらどうだい。」

「ありがとう。僕は、まんまる大将のお日さんと一しよに、パチンと割られるよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。どうも馬鹿で手がつけれられない。」

丁度その時、霧が晴れて、お日様の光がきん色に射<sup>さ</sup>し、青ぞらがいっぱいにあらわれましたので、稜のある石どもは、みんな雨のお酒のことや、雪の団子のことを考えはじめました。そこでベゴ石も、しずかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげました。

その次の日、又、霧がかかりましたので、稜石どもは、又ベゴ石をからかいはじめました。実は、ただからかったつもりだっただけです。

「ベゴさん。おれたちは、みんな、稜がしつかりしているのに、お前さんばかり、なぜそんなにくるくるしてるだろうね。一緒に噴火のとき、落ちて来たのにね。」

「僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまわったからね。」

「ははあ、僕たちは、空へのぼるときも、のぼる位のぼって、一寸とまった時も、それから落ちて来るときも、いつも、じつとしていたのに、お前さんだけは、なぜそんなにくるくるまわったろうね。」

その癖、こいつらは、噴火で砕けて、まっくろな煙と一緒に、空へのぼった時は、みんな気絶していたのです。

「さあ、僕は一向まわろうとも思わなかったが、ひとりでからだがまわって仕方なかったよ。」

「ははあ、何かこわいことがあると、ひとりでからだがふるえるからね。お前さんも、これによったら、臆病のためかも知れないよ。」

「そうだ。臆病のためだったかも知れないね。じつさい、あの時の、音や光は大へんだつたからね。」

「そうだろう。やつぱり、臆病のためだろう。ハッハハハッハ、ハハハハハ。」

稜<sup>かど</sup>のある石は、一しよに大声でわらいました。その時、霧がはれましたので、角<sup>かど</sup>のある石は、空を向いて、てんでに勝手なことを考えはじめました。

ベゴ石も、だまって、柏<sup>かしわ</sup>の葉のひらめきをながめました。

それから何べんも、雪がふつたり、草が生えたりしました。かしわは、何べんも古い葉を落して、新しい葉をつけました。

ある日、かしわが云いました。

「ベゴさん。僕とあなたが、お隣<sup>とな</sup>になつてから、もうずいぶん久しいもんですね。」

「ええ。そうです。あなたは、ずいぶん大きくなりましたね。」

「いいえ。しかし僕なんか、前はまるで小さくて、あなたのことを、黒い途方<sup>とほう</sup>もない山だと思つていたんです。」

「はあ、そうですね。今はあなたは、もう僕の五倍もせいが高いでしょう。」

「そう云えばまあそうですね。」

かしわは、すっかり、うぬぼれて、枝を<sup>えだ</sup>ピクピクさせました。

はじめは仲間の石どもだけでしたがあんまりベゴ石が気がいいのでだんだんみんな馬鹿にし出しました。おみなえしが、斯<sup>こ</sup>う云いました。

「ベゴさん。僕は、とうとう、黄金<sup>きん</sup>のかんむりをかぶりしましたよ。」

「おめでとう。おみなえしさん。」

「あなたは、いつ、かぶるのですか。」

「さあ、まあ私はかぶりませんね。」

「そうですか。お気の毒ですね。しかし。いや。はてな。あなたも、もうかんむりをかぶつてるではありませんか。」

おみなえしは、ベゴ石の上に、このごろ生えた小さな苔<sup>こけ</sup>を見て、云いました。

ベゴ石は笑って、

「いやこれは苔ですよ。」

「そうですか。あんまり見ばえがしませんね。」

それから十日ばかりたちました。おみなえしはびっくりしたように叫びました。

「ベゴさん。とうとう、あなたも、かんむりをかぶりしましたよ。つまり、あなたの上の苔

がみな赤ずきんをかぶりしました。おめでとう。」

ベゴ石は、にが笑いをしながら、なにげなく云いました。

「ありがとう。しかしその赤頭巾は、あかずきん 苔のかんむりでしよう。私の中ではありません。私の冠は、かんむり 今に野原いちめん、銀色にやって来ます。」

このことばが、もうおみなえしのきもを、つぶしてしまいました。

「それは雪でしょう。大へんだ。大へんだ。」

ベゴ石も気がついて、おどろいておみなえしをなぐさめました。

「おみなえしさん。ごめんなさい。雪が来て、あなたはいやでしょうが、毎年のことで仕方もないのです。その代り、来年雪が消えたら、きつとすぐ又いらつしやい。」

おみなえしは、もう、へんじをしませんでした。又その次の日のことでした。蚊がか一疋びきくうんくうんとうなつてやって来しました。

「どうも、この野原には、むだなものが沢山たくさんあつていかな。たとえば、このベゴ石のようなものだ。ベゴ石のごときは、何のやくにもたたない。むぐらのようにつちをほつて、空気をしんせんにするということもしない。草っぱのように露つゆをきらめかして、われわれの目の病をなおすということもない。くううん。くううん。」と云いながら、又向うへ飛

んで行きました。

ベゴ石の上の苔は、前からいろいろ悪口を聞いていましたが、ことに、今の蚊の悪口を聞いて、いよいよベゴ石を、馬鹿にしはじめました。

そして、赤い小さな頭巾をかぶったまま、踊りはじめました。<sup>おど</sup>

「ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

あめがふつても黒助、どんどん、

日が照つても、黒助どんどん。」

ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

千年たつても、黒助どんどん、

万年たつても、黒助どんどん。」

ベゴ石は笑いながら、

「うまいよ。なかなかうまいよ。しかしその歌は、僕のかまわないけれど、お前たちには、

よくないことになるかも知れないよ。僕が一つ作ってやろう。これからは、そつちをおやり。ね、そら、

お空。お空。お空のちは、

つめたい雨の ザアザザ、

かしわのしずく トンテン トン、

まつしろきりの ポツ シャン トン。

お空。お空。お空のひかり、

おてんとさまは、カンカンカン、

月のあかりは、ツンツンツン、

ほしのひかりの、ピツカリコ。」

「そんなものだめだ。面おもしろ白くもなんともないや。」

「そうか。僕は、こんなこと、まずいからね。」

ベゴ石は、しずかに口をつぐみました。

そこで、野原中のものは、みんな口をそろえて、ベゴ石をあざけりました。

「なんだ。あんな、ちつぽけな赤頭巾に、ベゴ石め、へこまされてるんだ。もうおいらは、

あいつとは絶交だ。みつともない。黒助め。黒助、どんどん。ベゴどんどん。」

その時、向うから、眼が<sup>め</sup>ねをかけた、せいの高い立派な四人の人たちが、いろいろなピカピカする器械をもつて、野原をよこぎつて来ました。その中の一人が、ふとベゴ石を見て云いました。

「あ、あつた、あつた。すてきだ。実にいい標本だね。火山弾の典型だ。こんなとものつたのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしてることね。もうこれだけでも今度の旅行は沢山だよ。」

「うん。実によくとのつてるね。こんな立派な火山弾は、大英博物館にだってないぜ。」  
みんなは器械を草の上に置いて、ベゴ石をまわつてきすつたりなでたりしました。

「どこの標本でも、この帯の完全なのはないよ。どうだい。空でぐるぐるやった時の<sup>ぐあい</sup>場合、実によくわかるじゃないか。すてき、すてき。今日すぐ持つて行こう。」

みんなは、又、向うの方へ行きました。稜<sup>かど</sup>のある石は、だまつたため息ばかりついています。そして気のいい火山弾は、だまつてわらつて居<sup>お</sup>りました。

ひるすぎ、野原の向うから、又キラキラめがねや器械が光つて、さっきの四人の学者と、村の人たちと、一台の荷馬車がやつて参りました。

そして、柏かしわの木の下にとまりました。

「さあ、大切な標本だから、こわさないようにして呉くれ給たまえ。よく包んで呉くれ給たまえ。苔こけなにかむしつてしまおう。」

苔は、むしられて泣きました。火山弾はからだを、ていねいに、きれいな藁わらや、むしろに包まれながら、云いました。

「みなさん。ながながお世話でした。苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたつて下さい。私の行くところは、このように明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん。」

「東京帝国大学校地質学教室行、」と書いた大きな札ふだがつけられました。

そして、みんなは、「よいしょ。よいしょ。」と云いながら包みを、荷馬車へのせました。

「さあ、よし、行こう。」

馬はプルルと鼻を一つ鳴らして、青い青い向うの野原の方へ、歩き出しました。





# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 気のいい火山弾

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>